

## 史料紹介

古宇田 亮 修

当研究所では、平成十七年度(二〇〇五)より社会福祉法人錦華学院に所蔵される東京感化院時代の史料の翻刻公開を開始した。本号はその五冊目に当たる。史料の翻刻作業については、前号に引き続き北都古文書研究会(会長齋藤博氏)の御協力を仰いだ。ここに銘記し、会員諸氏の御尽力に対し厚く御礼申し上げる次第である。また本号の編集・版下作成は、筆者が担当したものである。なお、校正に際しては、菅田理一(淑徳大学)ならびに三浦周(大正大学総合佛教学研究員)の両氏に御協力頂いた。ここに記して謝意を表したい。

さて、平成十六年(二〇〇四)に三好一成研究員を中心とする当研究所の調査班によって発掘、整理された錦華学院所蔵の東京感化院関係史料のうち、全体の五五%余りの分量を占める日誌類については、『史料集(2)』の解説(1)において目録を公開し、院報類については『史料集(3)』の解説(2)において目録ならびに主な内容を紹介した。そして『史料集(1)』(4)において、明治二十年から三十三年にわたる時期の日誌類一七冊の翻刻を公開してきた。本号では、明治三十四年から三十八年にわたる時期の日誌類四冊の翻刻を収録するものである。

〈史料20〉日記 教務科(明治三十四年一月起)

一五七丁からなる和綴じ本であり、欄外に「十二」と印刷された一二行書きの野紙が用いられている。記載期

間は明治三十四年一年分である。元日から三月三〇日の途中までは、川又亮熙によって記載されている。三月三〇日途中から四月六日まで、川又が帰省のため高瀬紹卿によって記載されている。四月七日から九日まで、川又に戻っている。そして、四月一〇日以降は清水橋村（孝教）<sup>(3)</sup>によって記載されている。

内容としては〈史料16、18、19〉の後継と考えられるものであり、それらと同様の事項が記載されている。なおこの日記には一月二五日と二六日の間に挟み込み書類が一枚存在したので、末尾にその翻刻を掲載した。内容は、文庫を管理する管庫という役付を新設する旨が院長高瀬真卿によって記されたものであり、一月三〇日の日記には、実際に院長よりこの通達が出されたことが記される（ただし、日記に記載される文面は数文字異なるが、これは日記記載者の誤写とみなされる）。また、三月三〇日までは、曜日の次に「紹卿」の印が押されていることが多く、四月一二日以降は、しばしば欄外に「真卿」の印が押されている。ただし、一〇月一四日を最後にそれも途絶えている。

〈史料21〉当直日誌 庶務科（明治三十四～三十六年）

六二丁からなる和綴じ本であり、そのうち五八丁に記載がある。欄外に「十二河内」と印刷された一二行書きの野紙が用いられている。記載期間は明治三四年元日から、三七年一月三日までである。記載者は、岡西閑亭、近藤奏水、高山樹堂（七郎）、清水橋村（孝教）、小石孚治郎、中原朝香（栄治）、高瀬紹卿、日野松泉（太市）、米池義一、谷山啓太郎の各氏である。内容としては〈史料9、11、15、17〉と同系であり、感化院の運営に関する事務の記録である。末尾には休日当直の一覧表があり、当直を行なった際に押印したものと考えられる。

〈史料22〉日記 教務課（明治三十六年度）

九九丁からなる和綴じ本であり、欄外に「十二河内」と印刷された一二行書きの野紙が用いられている。記載期間は明治三六年一年分である。記載者は中原朝香（栄治）である。欄外には、ほぼ全日に「紹卿」の印が押されている。内容としては〈史料16、18、19、20〉と同系と考えられるものであり、それらと同様の事項が記載されている。

〈史料23〉日誌 庶務課（明治三十七〜三十八年）

一五〇丁からなる和綴じ本であり、一四九丁目まで記載がある。欄外に「十二河内」と印刷された一二行書きの野紙が用いられている。記載期間は明治三十七年元日から明治三十八年一月二八日までである。明治三十七年元日から三月四日までは、高山樹堂（七郎）が記載している。三月七日には、高山のほか、米池義一（教部）、谷山啓太郎（書記）、細田豊次（助勤）の三人が依願退職をしている。三月五日から九日は岡西閑亭が、三月一〇日から七月一九日は中原朝香（栄治）がそれぞれ記載している。七月二〇日に中原は依願退職しており、それにより七月二二日に清水橘村（孝教）が書記兼教部補に任用されている。七月二〇日から二二日は岡西が記載しているが、七月二三日以降はすべて清水が記載している。内容としては〈史料9、11、15、17、21〉と同系であり、感化院の運営に関する事務の記録である。明治三十七年七月二四日までは、欄外に「紹卿」の印が押されていることが多い。

註

- (1) 「史料の概要紹介」（『東京感化院関係史料集(2)』（長谷川仏教文化研究所年報 第三一号別冊）所収）、二〇〇七年三月。
- (2) 「史料紹介」（『東京感化院関係史料集(3)』（長谷川仏教文化研究所年報 第三二号別冊）所収）、二〇〇七年七月。
- (3) 詩人としての清水橘村については、小野孝尚教授（茨城女子短期大学）によって詳細な研究がなされている。「清水橘村年譜試案」『茨女国文』第一一号、一九九九年所収。「橘村詩考」『茨女国文』第一二号、二〇〇〇年所収。「清水橘村研究」（その1〜4）『茨城女子短期大学紀要』二四〜二八号、一九九七〜二〇〇一年所収。また、島本久恵『明治詩人伝』筑摩書房、一九六七年、四二〜六〇頁にも言及がある。

（当研究所 主任研究員）